

都市の中の農―農から学ぶ現代社会

第183回フォーラム「世田谷の農地を活かす―農・食・住」を11月7日、東京農業大学（世田谷区）で開催した。当フォーラムでは、「農」は初めてのテーマである。入江彰昭氏（東京農業大学講師）の司会・コーディネートが進められたが、日本食育学会と同日開催であったため、基調講演は合同でおこない、「食と農をむすぶ本物体験」をテーマに、進士五十八氏（東京農業大学教授・前学長）が話をされた。パネルディスカッションは、「世田谷の農地を活かす―農・食・住」と題し、会場を変えてII部としておこなった。

I部の基調講演で進士氏は、「現代的百姓（トータル・マン）になろう」と提言。食育と環境についての重要性を述べ、食育の究極の目的は、命の大切さを伝えること、食の前には、農がある。命の大切さを伝えるには農業体験が大切と強調した。

II部のパネルディスカッションでは、世田谷区瀬田の専業農家10代目で、地場の大蔵大根を復活させたひとりである大塚信美氏（大塚農園）は、野菜を中心に生産し、庭先で直接販売をしているため、



I部：進士五十八氏の基調講演。

消費者の直接の声を聞くことができ、求めるものが畑の中にあることの実感を述べた。次に、長谷川満氏（大地を守る会）は、有機野菜の生産農家と契約し、自然食品や有機野菜を直接消費者に届ける取り組みを30数年やってきた。食べ物が育った環境を知る事が大切と述べた。

続いて、齋藤幸夫氏（世田谷区産業政策部都市農業課長）は、農地は人間社会・地域社会のあり方に係わるものとして、世田谷区の農業振興計画について述べた。残念ながら農地は宅地並課税のため、年々減少しているとコメントした。

最後に、藤岡泰寛氏（横浜国立大学講師）は、農業園付きコーポラティブハウスの住人であり、自らの農ある暮らしを発表した。この共同住宅「ざくらガーデン」（神奈川県横浜市）は、農地オーナーの資産保全の例として、知られているものである。

討論では、陣内秀信委員長（法政大学教授）が、環境と食をつなげることが大切だが、今は環境と食が離れてしまっていると指摘。食という生命に係わる農業が、無機質といわれる都市の中に存在することの意味は大



II部：パネルディスカッション風景。

きいとコメントした。締めくくった。

会場では、大塚農園の朝採り大蔵大根が休憩時間に出され、多くの人が試食を楽しんだ。